



2 横山大観 鸚鵡くわく

一幅

大正十五年（一九二六） 紙本墨画
本紙七八・九×一〇六・四

3 横山大観 飛泉

対幅

昭和三年（一九二八） 絹本墨画
本紙各一七二・三×七一・五

大正十五年四月、横山大観（一八六八～一九五八）は宮内省より宮殿の調度として屏風と掛幅を制作するよう命じられた。初めて自作が皇室に納められることとなり、水戸出身の勤皇思想の篤い横山は一心に制作に打ち込み、屏風には富士を描いた「朝陽霊峰」（当館蔵）を、そして掛幅としてこの「飛泉」を完成させた。豊明殿を飾る屏風には金泥で壮大なスケールの富士を描くのに対し、掛幅は大正天皇の御座右になるということで威風堂々たる滝を墨一色で描き出した。飛泉とは勢いよく落ちる瀑布の意である。右幅の大胆な余白と背景のぼかしは、流れ落ちた水が岩にぶつかって立ち上る水煙を表しており、左幅の滝の勢いを一層強調する効果をあげている。また対角線を意識した右幅の構図は、南宋絵画の影響をうかがわせる。

この屏風と掛幅の制作にあたり、参考として宮中および赤坂御苑の拝観が許可された。その時に吹上御苑で飼育されていた珍鳥、鸚鵡（叭々鳥）を目にして画想を得た横山は、これをもとに「鸚鵡」を描いて貞明皇后に献上した。麻紙ににじむ柔らかな墨の調子が愛らしい鸚鵡の姿と調和し、横山がしばしば参考にした牧谿を思わせる出来となっている。その揮毫にあたり墨は徳川圀順侯爵家に伝わる明代純斎製の松煙墨、筆はイタチの毛を用いた宮内得応軒の作、紙は岩野平三郎が奈良平安朝の古紙を研究し開発した麻紙を用いており、道具や素材の一つ一つに一切の妥協をせずに最高のものを作ろうとしていたことがわかる。

そして「鸚鵡」「飛泉」に共通する表情豊かな水墨表現は、南宋から元時代の中国絵画を意欲的に研究した末にたどり着いた横山ならではの描法と言えよう。



3
横山大観
飛泉

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

花ひらく個性、作家の時代―大正・昭和初期の美術工芸

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 50

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十二年三月三十日発行

© 2010, The Museum of the Imperial Collections